スクールアイドルの信条

ちりめ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

沖田華乃の家はかつてテンプル騎士団、しかし、それを裏切り、先祖はアサシン教団へと寝返った

彼の敵はテンプル騎士だけでなく、寝返って尚も彼には刃が向けられた。彼はアサシンまでもが敵となった

ラブライブにアサシンを混ぜたかっただけ

目次

プロローグ ―――― 1
Contact・Sequence01 ―――― 8
Memory2 ―――― 13

プロローグ

明けない夜はない、という格言がある。常識的に見ればそれは当たり前だ。あくまでもこの言葉の真意は、どんな絶望を前にしても、希望は必ず存在する、といったところだろう。家の屋根上に立ちながら、朝日を拝む俺、沖田華乃

「また登ってる～、降りておいで～、華乃ちゃん」

「姉様…その呼び方…はい」

うちの家系は、代々、テンプル騎士団と呼ばれる裏組織のメンバーだ。しかし、うちの８代前、沖田家を歴史にした沖田総司、彼の父親は当然ながらテンプル騎士だったが、母親はアサシン教団という、テンプル騎士団とは敵対する組織に属していた。所謂、禁断の恋というやつだ。色恋は経験がないので知らないが

「華乃ちゃん華乃ちゃん、今日は穂乃果ちゃんと海未ちゃんがうちに朝のお迎えにくるからね～」

その時からうちはアサシンの家系へと変貌した。昔から鍛冶がそれなりに強いこともあってか、アサシンに鞍替えしてからは、彼らの主力な暗殺武器、アサシンブレードの製作を任されるようになった。うちの家では、１２になる前に、鍛冶の技術か、アサ

シンとしての本格的な教育を受けるかのどちらかになる。俺は二人目だったこともあり、現在では相対的な価値が低い鍛冶を中心に、最低限のアサシンの技術を教えられた。姉様は、教団のアサシンになるつもりだったそうだ

「ねぇねぇ、華乃ちゃん、今日はお姉ちゃんが朝ご飯作ったんだよ、どうかな?」

味噌汁…昨日作ったやつを温めなおしたものと、魚の煮付け。少し辛くて米に合う。やはり米ｌｏｖｅだ

「うん、美味いよ、姉様なら、料理番組にでても完璧にこなせるよ」

「そんなに褒められると…は、恥ずかしいかな…」

「言い出しっぺのくせして」

姉弟の糖分８５％くらいの朝、たまにある。でも、そんな姉様は、音ノ木坂の廃校を阻止しようと、日夜スクールアイドルとして活動している

「今日も忙しくなるねぇ、華乃ちゃん♪」

「楽しそうですよ?」

「うん♪」

この間もライブだーと騒いでいたし、本当に楽しいのだろう。表現としては幼稚かもしれないが、やっぱり、姉様のいるスクールアイドルグループ、μ’ｓの皆を見ていると、キラキラしていて格好良かった、これは率直な意見だし、本音だ

朝食を終えて、いつでも行けるとなる頃はまだ五時半、それが日常と化している半面、狙っているというのも否めない。それもそうだろう。ゲームだ。いい歳こいてと思われるかもしれないが、仕方のない。やはり楽しいのだ

暫くして

「あっ、帰ってきた！」

「ん」

姉様がそういうと、俺は窓から手をだし、そいつが乗れるようにする。ほぼそれが完了すると同時に、そいつは腕をがっしりと掴んで体を預ける

「セヌ、おかえり」

「おかえり～♪」

「ーーーッ!!」

セヌはうちで飼っていた鷹で、俺が一人になってからも側にいてくれた親友だ。ちなみに雄だ

「セヌが帰ってきたなら、そろそろかな？」

時計を確認すると、丁度ぴったり、七時だ

バッグを持ち、靴を履きながら姉様にいつもの一言

「今日は？」

「遅い…かな」
「りょーかい。母さんは昨日から泊まりだよね？」
「うん、そうだよ。私は海未ちゃん、穂乃果ちゃんと行くね」
「穂乃果姉さんに引っ張られ過ぎて遅刻するなよ」
「うん、わかってるよ」
「ならいいんだが、いってきます」
「いってらっしゃい♪」
とまぁ、これがいつもの日常。セヌは基本夜行性で、学校までは腕に乗せるが、校門で別れ、家で眠り、夕方に起きて飛び回るという、かなり合わない生活習慣をしている。
姉様とは駅までは一緒だが、俺は共学の高校に通っている。女子校なら男子校、では映えない話だ
駅前を横にまがり、軽く名物と化した鷹と登校する俺。前にＳＮＳで鷹を腕にのせた美少女、なんてのを見たときは泣きそうだった。女かよ。姉様の趣味だ、完全に。俺は知らん。そんなに女っぽいか？
「よお、元気か、この幸せ者めが！」
後ろから背中をバシンとかなりの音を立て叩かれた
「あだっ！てめぇ…」

同級生だ…こいつは姉様のファンらしい
「なぁ、サイン、頼むよ、マジで。ことりちゃんのサイン！」
なんだこいつ、ほんとに
でも、そんな日常が、子供の俺を殺してくれる。闇に葬ってくれる、ずっとそう思っていたかった。それはある日、即ち俺の家族たち、そして殺しあった数多のテンプル騎士、アサシンたちの対立の血で濡れた黒い歴史

いかん。朝からブルーな気分なのはよろしくない。健康的にも一日の気付けにも

「南！お前、後ろ！」
「は？……え……？」
腹のなかに音が響いた。ザクッとも、ドスッとも聞こえた。その男は、フードをつけていたんだ。俺を、刺した男は
（お前らが…いなければ」
「さらばだ、偉大なるアサシンの子たちよ。偉大なる、マスターアサシンの子、そして仇敵、テンプル騎士マスター、ローグアサシンのシェイの忌みの血を継ぐもの」

今、なんて？
姉様の平穏もきっと壊れる。このままじゃ、全部
なら殺してやる。アサシンも、テンプル騎士も
俺が生き残った暁には、ローグアサシンに、ローグ騎士として

「華乃ちゃん、ねぇ！華乃ちゃん！」
「姉様、うるさい…姉様？」
俺って…生きてる？
「起きた！わかる？ここ、真姫ちゃんの病院！」
「よーくわかった、愛のある解説ありがとう、離してくれ」
姉様が抱きつきながら聞いてない説明をしてくる。俺は生きてる。それは間違いないが、ただ、死んでいないだけだ
「ねぇ、華乃ちゃん、私達、今度が最後のライブなんだ。最後の曲。三ヶ月だよ、こんな

に寝てたんだよ」

「え？」

姉様達が最後…？

あぁ、よくしてくれたみんなに、顔が向けられない

姉様も顔を曇らせている。当たり前だろう俺が起きた、そしてμ’ｓの最後。泣くだろう、当然だ

「ねぇ、姉様。俺、最後のわがままを言ってもいいかな」

自分でもきっと言うべきでないとわかっていて、俺は虚しい傷の舐めあい、慰めを選ばず、心の底に捨てたはずのかつての因縁を受け入れた

Contact・Sequence01

姉様たちにだした提案、それは俺の生まれた町、内浦に帰るという話だ。
わがままというよりは、姉様を巻き込みたくなかったから。実際には数年間隠れ回ったので、ここまでかかったのも、アブスターゴやアサシンの目はバカにできないレベルなのは間違いないだろう
「覚えてないな…」
とはいえ、内浦の家なぞ既に燃えカスが残っているかどうかさえわからないため、沼津に安いアパートを借りた。バイト片手間、奴らへの警戒といったかんじになる。俺は死んだことにしたほうがよいというので、司法の力を濫用してここに俺がいる
しかしながら、沼津駅前に部屋を貸してくれるという大家さんが待ってるという話だが、いざ来てみると、まぁいないこと。
「探した方が良いかもな」
確認のため、上から見渡せるような場所がないか周りに目を這わせてみる
「……?なにしてんだ、あの娘」
駅前できょろきょろと明らかにこのあたりに慣れていない風だ。鮮やかな赤髪、かな

り落ち着いた雰囲気が目立ち、それが第一印象だった
なんとなく、声をかけてみようと思った。もちろん、警察沙汰になれば、こっちの苦労は水泡に帰すのにだ
それでも、一度目標を後先見ずに定めれば、足どりは速い。群衆と一体化して目立たないように歩きながら目的の場所まですらすらと進む
ものの数秒で、その場でおろおろとし続ける少女の元へとたどり着く。成人男性が駅前の少女へ近づいているなんて通報のあった日には、俺の社会的名誉に多大な損害がでる。既に納税義務もろくにはたしていないのに名誉とはこれいかに
そんな話は外野へ押し退け、少女へできるだけ明るみのある無理の無い声で話しかける
「君、どうかしたのか?」
口調や表情にはでていないが、今更のようにやらかした、という後悔が押し寄せてくる
「えっ、…えっと…」
まずい。あからさまに困惑している。これはやらかした。仮にも仇敵とはいえ、アサシンの末端としては恥というものではなかろうか。いや、それ以上だ。勿論、これがアサシンがやらかした、という事実だけなら清々しいのだが、自分の身にふりかかる不幸

は蜜ではなくヘドロである
「その…切符…なくしちゃって…」
「え？」
　思わずふざけた声をあげてしまうが、実際に、今どき切符を買うのか、という言い訳には少し苦しい理由であったりする。だが、よく考えてほしい。最近はＩＣカードにすると特典が付くという話もある。勿論、俺もＩＣカードにしている。バスと電車両方に対応してるやつで、さっき買った
「ＩＣカード、買ってないの？」
「今度、買うつもりだったので…」
「今から買ってきなよ」
「今、学生証がないんです…」
「…どこまで行くの？」
「内浦です…」
　しかも結構かかるし
「よし、わかった。探そう」
「え…探す…ですか？」
「ああ、探す。電車いつ？」

「あと3分、くらい…しか」
「買いなおすとかすればよかったのに…よし、俺のやつ貸すから、内浦ついたら駅員の人に渡して。落とし物って」
「えっ、でもそれって」
「遅れるよ、迷惑ならそれで内浦ついてからだ」
ＩＣカードを押し付けながら少女を催促させる。荷物は少なかったし、問題ないだろう
「あ、ありがとう…ござい、ます」
「ああ、じゃあ、また縁があれば」
「あの、私、桜内梨子っていいます…」
少女がぼそぼそと小さな声で自分の名前を告げてきた。ほんとに消え入りそうな声で、周りの喧騒も相まってようやく聞き取れるほどでしかない
「そうかい、じゃあ俺も返事しとこう。沖田華乃、また会うとしたら沖田でいい」
「…！はい！」
梨子ちゃんは意外といい反応を示してくれた。その後はそこで別れ、俺は家主さんを探しに再び駅前をうろつくことにする。普段から根なし草だったこともあり、最低限の生活のため、引っ越しなどと大層に言っても、ボストンバッグひとつに収まる程度であ

る

「ほんとにいんのかよ…」

そろそろ大家さんの存在そのものを疑おうというときだった

「あー、いたいた！沖田君ね？」

後ろから突然声をかけられ、一瞬、背筋に寒気と緊張が走る

「ごめんねー、探したでしょ？」

いかにも主婦やってます、みたいな様の初老の女性がその見た目に反した高い声で俺を労り始める

「でも、実はね、今、水道管が破裂しちゃってて、一週間くらい、その、どこかに泊まってほしいの」

俺の予想からはゆうに８０度は反しているであろう一言が盛大にぶちまけられる

こうして、俺の帰郷初日は、星空の歓迎が激しいであろうことが、１２０％確定してしまった

Memory2

「…最悪」

駅近場の公園にあるベンチに腰を下ろし、目の前で無邪気に遊ぶ子供たちを眺めながら、というよりは、視界にいれているだけだが、これからの一週間をどうすごすか、というこの歳らしい、実に不可解かつ最もアクティブに生きるべき時を、一般的な大人と同じように悩んでいた。正直、この歳になってもガキなのは認める

それだけだが、次には繋げない。俺は俺だからな

「ん？」

黄昏ている俺に呆れたかのように入る着信。知らない番号だ。知ってる番号が少ない、が１００点の回答なんだけどね

「はい」

「あっ、沖田君？ちょっと時間大丈夫？」

大家さんだ。契約じゃ確認以外では使わないとか書いてたけど、使ってんじゃん

「はい、大丈夫です」

なわけないだろ

「よかった。あのね、やっぱりこっちに来たってあてがないわけなのよね？だったら、せめて居間くらいは使えそうだから、来ないかなって思って連絡したんだけど…」
　天は我を見捨てなかった
「ええ！是非とも！喜んで行かせていただきます！」
「そう、よかった。案内するから、駅で集合、それでいい？」
「ええ、では」
　会話を切るなり、ベンチから自分でも驚くほどの速度で立ちあがり、駅まで走り始める

　かなり早く駅には着いた。当然、待ち人は未だ来ずなので、駅に入り、定期のことを聞くことにする
「ああ、あれ、お兄さんのですか」
「というと？」
「いえいえ、三つ隣の駅で渡されたらしくって」
　そういいながら駅員の指す親指の先は内浦ではない
　やっぱり引っ越しか。親御さんと待ち合わせだろう
「そうなんですか、まぁ、そういうこともあります」

我ながらボロ全開の苦しい言い訳とともに定期を受け取り、駅を後にする
「あら、沖田君、来てたの？」
「ええ、近くにいたもんですから」
駅をでてすぐに大家さんとは会えた。その後はなんの問題もなくこれからの我が家に着いた
「ここ、あなたの部屋よ」
そう言いながら鍵束から一つの鍵を選んで、扉を開ける大家さんが、よくドラマなんかでみるような風のアパートの一室、二階三号室の扉を開く
「お邪魔します」
「やぁね、その言い方」
ギギッと少し軋む扉の音と共に、少し錆び鉄の臭いが鼻につく。窓は誰かがくるまで開けないのは、まぁ防犯上は普通のことだが、なにかと好きじゃない
「その先ね」
俺の後から入った大家さんが玄関からわかりやすく狭い部屋のなかの居間を教えてくれた。わかるよ、これくらい
部屋に入る、というよりは、廊下を通ってきたという方が正しい気がする。そして、畳を踏んだ時に感じた傾いている、という違和感。それに加えて、なぜかさらにつく錆び

鉄の臭い。大家さんの制止を振り切り、設備の壊れた部屋のドアを開ける
今は止めているのだろうが、風呂場にある安っぽい給水のための水道管は、破裂、というよりは外からだ。そして、なにも片付けられている風には見えないのに、漏れたはずの水は残っていない。
俺が来るからと確認したのは今日、そのために片付けは一切できていないと聞いた。水道管の一部、大きな破片が見当たらない。細かいのはあるのにも関わらず
まさか
部屋に戻り、違和感を感じた畳の縁に指を入れる
「沖田君、だいじょ…なにしてるの？」
「っ！」
勢いよく畳を持ち上げると…ビンゴだ
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
死体だ。血の臭いか、これ
頭…やっぱり、切れてる。うつ伏せの姿勢。犯人は急いでたな
「とりあえず、警察を！」
「そ、そうね！」
周りの住人への通達と警察への連絡のために外へ出る大家さんを見送り、そのタイミ

ングを見図って、死体の腕に付けられたそれ、アサシンブレードへと手を伸ばす
「オチが見えたな」
死体は左腕にしか小剣は付いておらず、構造も
正面戦闘を想定していない一般的な暗殺型のアサシンブレードだ
小剣はとりあえずバッグへしまいこみ、あとは警察を待つことにする

「最悪だった」
第一発見者はまず疑われるというのは、こういう業界の習わしなのはわかるが、現に危険物を持っている俺は一度食い込まれると面倒になるというレベルではなかったろう
調査が入るわ、周りの住人の視線が痛いわで、警察からの宿泊のお誘いも断って逃げるように出てきた。やだよ、宿直室とか
「君、大丈夫だった？」
またもや後ろから声をかけられ、そろそろアサシンとしての訓練を受けた身としてはプライドがやられそうなんだが
「大丈夫もなにも、問題がありませんので」
「そうなの？泊まるとこないんじゃない？」

「星を見るのは悪くありません」
「そんなこと言っちゃって…もしかしたら、一夜の宿なら、教えてあげられるかも」
「……聞くだけなら…」

その結果が
「これかよ」
俺は今、寺で仏門に励んではいないが布団に籠っている。怖いよ、夜中まじで
「……明日はいーことありますよーに、阿弥陀様」